

リベリア



UNHCR/P. STROMBERG

リベリアで登録を受けるシエラレオネ難民。

リベリアにおける帰還の年

難民たちが故郷に帰ってきた……ただしペースは遅れ気味だ

ポール・ストロンバーグ

今年は「リベリアの年」になるはずだった。この10年間、リベリアはアフリカ史でもっとも残忍な内戦のひとつで、繰り返し引き裂かれてきた。人口の大部分は精神的な傷を負い、虐殺されたり、近隣諸国に逃げだした。リベリアという国は、完全に崩壊してしまっただけでなく、近隣諸国にいたリベリア難民約50万人も、1998年には帰還計画（アフリカで最近実施されたなかでは最大規模だ）で戻ってくる見通しだ。

行く手には、無数の困難が待っている。最近リベリアを訪問して私が見たのは、内戦で荒廃し、衰弱した国土だった。大規模なゴム園やコーヒー農園はいくつかが運営を再開したが、軍の検問所が、依

然として首都モノロビアの路上や、地方の交通の要所に置かれている。家々には屋根がなく、肥沃だった農地はとうに熱帯雨林に飲み込まれてしまった。

学校や保健センターはほとんどないし、仕事を求めてモノロビアに引っ越す帰還民も少なくない。多くの難民は、故郷の村と庇護国の間を行ったりきたりして、故郷で仕事を始めながら、よりよいキャンプの施設に依存している。

政治情勢は好転

国土を見るかぎり荒廃は激しいが、リベリアの政治情勢は、97年の大統領選以来、格段によくなっている。難民援助関係者は98年を「大規模帰還の年」と位置づけている。

UNHCRも昨年末、活動の目標を難民帰還の「円滑化」から、積極的な「促進」に変更し、主な帰還場所に事務所を設置した。リベリア難民帰還・再定着委員会は、帰還民を支援するために二人組のチームを作って、遠く離れた国境地帯にも送り込んだ。

1998年6月までに推定5万人の難民が、ポート、トラック、バスもしくは徒歩で帰還した。大部分は二大庇護国であるコートジボワールとギニアからの帰還民だ。リベリア当局は、さらに18万人が当局の支援を受けなくて「散発的に」帰還したとみている。

スタートは出遅れぞみ

当局は、帰還の進み具合が当初の目標より遅れていることを認め、その原因となった一連の問題を指摘した。一部の越境地点が不安定な地域にあり、数か月前に通れるようになったばかりであることや、帰還支援に必要な交通手段が不足していたため（UNHCRが車両を貸し出したが）、多くの人がキャンプで支援を待たなければならなかったことなどだ。

リベリア支援が、地味な活動だったのも大きな要因となった。最近この地を訪問したUNHCRのソーレン・イエッセンペーターセン高等弁務官補は、こうした状況への不満を次のように述べている。「アフリカ大湖地域の危機を訴えたとき、国際社会の関心は、旧ユーゴスラビアほど集まらなかった。西アフリカの場合はもっとひどい。」

こうした無関心は、資金難というかたちで顕著にあらわれた。UNHCRは今年、リベリアでの活動に4000万ドルを求めているが、おそらく集まるのは半分程度だろう。

資金不足は、いま始まったことではない。リベリア難民は、1993年に配給を半分に減らされ、95年からは、ごく限られた「弱者層」しか食糧援助をもらえなくなった。拠出国にも言い分はある。援助予算はこれまでになく減っているのに、配



UNHCR/C. SHIRLEY

半壊した家で生活するリベリア帰還民の家族。

分先はあまりにも多い。リベリアの場合、混迷状態が長くつづいているほか、援助資金の使途に不明な部分があることが資金の集まらない大きな原因になっていた。カーター米元大統領は最近、「資金が不正に使われれば、援助は今後まったくなくなるだろう」と語り、ゲリラの元指導者であるチャールズ・テイラー現大統領に警告した。

モザンビークとは対照的

こうした状況は、数年前のモザンビーク難民約200万人の帰還とは好対照をなしている。「モザンビークの場合、14年間の避難生活を終えて帰ってきたところには、何もありませんでした」と言うのは、UNHCRのカルンガ・ルタツ副代表だ。それはリベリアも同じだが、ルタツによると重要な違いがある。「モザンビークでは、(寛容な抛出国の支援で)必要な資金があったのです。」

ファツ・シェリフは、故郷に帰りたいたいと思っはいるものの、ひどく慎重な多くのリベリア難民の典型といえる。彼女

がギニアに逃げ出したのは1991年のこと。ロファ郡に6ヘクタールのコーヒーとココアの農園を残してきた。子どもたちはいま、ギニアにあるフランス語学校に通っている。多くの難民女性と同じように、ファツには夫がいなく、自宅と農園は森に飲み込まれてしまった。「何を食べていけばいいの？」と彼女は言う。「私たちみたいな女性は、何をすればいいの？」

現在のリベリアの悲しくも皮肉な状況は、シエラレオネ国境から約8キロのところにあるパフンで見られる。この町は森林に深く飲み込まれ、地図にもついていない。しかしこの荒れ果てた泥とレンガの家の町に、過去数か月間で5万人以上の難民が、とぼとぼ歩いて帰ってきた。

UNHCRのフィールド職員ギルマイ・ウォディモは、雨期に備えて、道路脇に溝や路肩をつくらうと、数十人の部下と忙しそうに働いている。パフンの場合、

これが外の世界につながる唯一のルートだから、新たに到着する人々の支援のためにも、常に通れるようにしておかなければならないのだ。

しかしこの「新たに到着する人々」とは、リベリア帰還民ではない。新たな国内の混乱を逃れてきたシエラレオネ難民だ。

まったく皮肉と希望にあふれた状況だ。シエラレオネ難民が安全を求めてやってくるのは、すでに世界の最貧国に数

えられ、最も荒れ果てた国だ。インフラは破壊しつくされ、いまま必死に再建の努力をする一方で、数十万人の帰還民を迎え入れている。

シエラレオネ難民は、リベリア政府の重荷になっており、リベリア難民

の帰還計画にも影を落としている。しかしそれだけに、このどうしようもないほど貧しい国が、別の虐げられた人々たちをすすんで助けようとしている姿が際立ってみえる。

リベリア支援が地味な活動だったのも、資金が集まらない大きな要因だった。

ソマリア



UNHCR/P. KESSLER

ソマリアでの暮らしは厳しく、人々の国外流出が続いている。

新たなボートピープルの波

無数のソマリア人が終わりのなき紛争から逃れていく

ピーター・ケスラー

夜の闇にまぎれて、小型漁船がこっそりとイエメンの岸に近づいてきた。船長は、沿岸警備隊のパトロールにみつかるのを恐れて、寄せきった80人のソマリア

人ボートピープルを紅海のまだ深い水域に降ろした。元警察官のアリ・ヤフエ・サディク一家は、まず妻と子どもたちが、それにアリが続いた。荒れくるう海のなかで必死にもがいたアリは、なんとかもう一度、密航業者の船によじのぼ

ったが、妻子と何十人もの仲間たちは波に飲まれてしまった。アリは翌朝入国を認められ、難民キャンプに入った。

すでに70歳を過ぎているアリ・ヤフエは、ソマリアの首都モガディシュで、何年にもわたる激しい内戦を生き抜いてきた。しかし事態は悪化する一方で、とうとう食べるものがなくなってしまった。仕事もないし、安全な暮らしもなかった。97年末、アリはもっと明るく安全な未来を求めて、紅海をわたるイエメンへの危険な旅を決意した。20年前の膨大な数のベトナム人ボートピープルと同じように、ソマリアを脱出しようとする人々は、増加の一途をたどっている。

アリの10人家族は、まずボサソ港を目ざして北に向かったが、平時なら数時間の旅は4か月もかかった。ソマリアを分断割拠する武装勢力を避けなければならなかったし、南部を襲った季節はずれの大嵐(エルニーニョの影響だ)で洪水が起きたため、無数の回り道をしなければならなかったのだ。

ボサソは、数年前まで人口5000人ほどの静かな村だったが、いまや10万人がひしめく町になっている。ボサソは正式な渡航手続きなしでイエメンにわたれる玄関なのだ。しかしバベルマンデブ海峡をわたる旅は、世界で指折りの危険をとまなう。

ボサソから出ている密航業者の船は週に数便。98年4月までに、この危険な夜の旅に出た人は6000人にのぼる。定員をはるかにオーバーした船のなかは押し合いへしあい、みな立ちつくしたままだ。雨期のごく短期間は下火になったが、地元当局によると、最近またソマリア人を乗せたトラックが一日3~4台、モガディシュなど南部の各地からボサソに到着している。

すべての希望を失って

「怖いけれど、他にどうしようもありません」と言うのは、夫を殺されてモガディシュから逃げてきたファリア・ラ

シッド・アブディ(25歳)だ。彼女も3人の子どもたちも泳げないが、「危険は承知のうえです。希望がすっかりなくなってしまったのだから」と語気を強める。モハメド・ジャマ・アリ(19歳)と妻、そして1歳半の赤ん坊も、ボートと新たな未来に希望を託している。「職場に民兵がやってきて、何もかも奪っていきまし」とアリ。「それでイエメン行きを決めたのです。恐れはありません。妻はとも怖がっていますが。」

ハワ・モハメド・オスマンも、銃をもった男たちのいる故郷の町を逃げてきた。彼女は友人の宿探しを助けたのをきっかけに、ボサソで「旅行代理店」をはじめた。イエメン行きの船旅を手配する仕事で、料金はソマリア人ひとりにつき5ドル。昨年、ボサソ沖でボートが転覆して、数日にわたり死体が浜辺に打ち上げ

られたことがある。98年には、米海軍の船が、密航船から180人の死体の一部を発見した事件もあった。しかしビジネスはビジネスだ。ハワ・オスマンは、す

で4000人の密航を手伝った。「それでも彼らは行きたがるのです。だから助けます。イエメンの難民キャンプの生活でも、ソマリアにいるよりはましでしょう。」

たしかにイエメンにたどり着ければだ。密航業者は、たくましくて冷徹な船乗りたちだ。漁師をやめて、儲けのいい「人身密輸」をはじめた。船長は、密航者ひとりにつき35~50ドルをとる。乗り組み員は武装しており、小さな船にできるだけたくさんの人を詰め込もうと、船のまわりにビニールシートを高くはりめぐらせている。このためボートはひどく安定が悪くなり、荒れた海の旅は一段と

彼らはイエメンに行くために、世界でも指折りの危険な旅に出ようとしている。

UNHCR/P. KESSLER



イエメンのアル・ガヒン難民キャンプ。

危険になる。

船は、毎週水曜日と木曜日の夜にボサソを出て、沿岸警備隊にいちばん発見されにくい早朝か週末のイエメン到着を目ざす。運がよければ、ボートは海岸から500メートル以内まで近づいてくれるが、それでも荒波に飲まれておぼれ死ぬ人は後を断たない。

活況にわく辺境の町

イエメンも豊かな土地ではないが、ソマリア人はまずここを目ざす。ソマリア ▶

それでもソマリア難民は笑顔をみせる。



UNHCR/P. KESSLER



イエメンでもソマリア難民の暮らしは厳しい。

▶ から近いから親戚がいる場合もあるし、昔から難民に寛容だからだ。多くのソマリア人はイエメンはただ経路するだけで、最終的にはサウジアラビアなど石油で富を築いた国で仕事をみつけ、安全な生活を送りたいと考えている。

仕事も安全な生活も、砂漠の故郷ではみつからない。40万人ものソマリア人が周辺諸国に逃れたが、その数は毎日増えつづけている。政府と呼べるものはなく、かつてソマリアだった国は、いまや分裂して戦闘が絶えない。働き口もほとんどないし、悪いニュースも増える一方だ。去年は家畜が流行病にやられ、サウジアラビアなど各国がソマリア産食肉の輸入を禁止。数百万ドル相当の貿易収入が失われた。ボサソにちかい六つの国内避難民向けのキャンプでは、最近コレラ患者がみつまっている。

皮肉なことに、ボサソ自体は活況に沸いている。その原動力になっているのが、「難民はこび」だ。ハワ・オスマンは「代理店業」でかなりの利益をあげている。モスタファ・アブディ・シャーマークは、政情不安がつづくソマリア南部から逃げてきた熟練漁師を雇い、紅海でロブスター漁をさせ、それをドバイに運んで大儲けした。またその波及効果で、週2回

飛んでいるダマル航空の古いロシア製貨物機は、乗客のほか、ロブスター、フカヒレなど輸出向け特産品でいっぱいだという。

しかし国土の大部分は、長い戦争で荒れ果て、国際機関主導のプロジェクトの重要性が一段と増している。UNHCRは98年、北部・中部・南部ソマリアで給水、農業、インフラ、収入創出の計画を実施するために、控えめながら180万ドルの予算を組んだ。また「ソマリランド共和国」として独立を宣言した北西部では、

イエメンも貧しい国だが、難民を快く受け入れてきた長い歴史がある。

970万ドルのより野心的な計画を検討している。

97年以降、北西部には3万人ちかくの難民が、UNHCRの支援を得てエチオピアから帰還した。帰還民と地元民の当面のニーズを満たし、地域の安定化を支援するために一連の即効プロジェクト(QIPs)も作られた。しかし「平和を確実にし、帰還を促進し、新たな難民流出を

防ぐには、いま以上の支援を世界から求めねばならない」と、ソマリランド共和国の「首都」ハルゲイサにあるUNHCR事務所のアントン・パーウェイ所長は言う。

少しずつ変化の兆し

ハルゲイサは内戦で事実上破壊されたが、ボサソ同様、活気も出てきている。まだほとんどの建物ががらっぽだが、新しいホテルや会議場が作られ、衛星電話会社は競争を展開し、民兵ではなく制服を着た警官たちが町をパトロールしている。

ハウオ・サヘルは、97年5月にUNHCRのトラック隊で帰還して以来、ハルゲイサ郊外に住んでいる。彼女と8人の子どもうち2人は、毎朝日の出前に近くの雑木林でたきぎを拾い集め、一束1ドル50セントで売り、そのお金で水や穀物、砂糖を買っている。

「ひどい状態だなんて言えません。家に帰ってこられたし、平和なのですから」とサヘル。その表情には、本当の苦しみを知っている人間の不屈の精神が垣間見られた。

しかしどんなに危険な旅でも、国を出てイエメンに行くことで現状に抗議すると言う多くのソマリア人にとって、状況はあまりに厳しい。 ■



THE ECONOMIST

「山の上に羊がみえました。私は思ったものです。『羊だって私たちよりは運がいい。山という家があるのだから。私たちの家はどこにもない。』」

あるコソボ難民

「あまりにも多くの人々が物言わぬまま死んでいきます。」

スーダン人救援職員(スーダンの内戦と飢饉で数十万人の命が危ないことについて)

「『刑罰を免れる』という風潮は世界各地の暴力の悪循環に拍車をかけてきたが、国際刑事裁判所は、この風潮に対抗する最初の有効な武器となることを目指している。」

国連の主要5機関の共同声明(国際刑事裁判所の設立を擁護して)

「追いたてられたり、難民として暮らした後に帰還した経験のない人には、この気持ちはわからないでしょう。まるで生まれ変わったようです。」

ボスニア難民オマー・ズゴール(避難生活を終えて故郷の町トラックに帰還して)

「あなた方なら、大虐殺の後にも生きること、憎しみのあとにも愛があることを世界に示せます。それは、あなた方にしかできません。」

コフィ・アナン国連事務総長(ルワンダを訪問して)

「終わってよかった。ここに彼らの未来はない。」

20万人以上のベトナム人ボートピープルがいた香港収容所のトン・シュイコン監督官(収容所の閉鎖に際して)

「とんでもないたわごとだ。まったく馬鹿げている。事実ではない。」

タンザニアのムカバ大統領(ブルンジと戦うために難民を訓練させているとの噂を否定して)

「コソボ問題では、NATO(北大西洋条約機構)は決して傍観しない。1991年のボスニアを繰り返さない。」

ハビエル・ソラナNATO事務総長

「大クロアチアあるいは大セルビアの描かれたヨーロッパ地図など、現在もこれからも存在しない。」

ロビン・クック英外相(バルカン半島を訪問して)

「彼らは私たちと同じものを食べています。シャンプーも与えています。いまはヘアオイルを欲しがっていますよ。」

ジョン・マルート駐マレーシア米国大使(4月に難民申請をした8人のインドネシア人の状況を語って)

南米に吹くアジアの風

寛容な政府、人間としての柔軟性、故郷と新しいライフスタイルの間で揺れ動く人々の物語

ナズリ・ザキ

その小さな村は、「ザ・ファーム(農場)」と呼ばれている。畑にはトマトが熟し、赤トウガラシやサトウキビ、ショウガなども植えられている。変わっているのは、カトリック教会のほかに、小さな仏教寺院があること。南米大陸唯一の寺だという。「ザ・ファーム」にはアジアの香りがあふれているが、実はここは南米アルゼンチンのミシオネス地方だ。ラオス出身の20世帯が暮らしている。

ふつう難民は、母国の近隣国もしくは家族や文化、歴史の結びつきがある場所に安住の地をみつける。アルゼンチンはラオスから想像できないほど遠い。このラオス人たちは、どうやってここまで来て、とてつもなく困難なスタートを乗り越え、とうとう定住するにいたったのか。そこには政府の寛容性と人間の適応力、それに伝統と新しいライフスタイルの間で揺れつづけた人々の、並々ならぬ物語がある。

東南アジアからの難民流出がピークに達した1970年代、アルゼンチンはベトナム、カンボジア、ラオスから約300家族を受け入れることで合意した。ラオス人たちは、ほとんどが兵士か都市部の商人だったが、受け入れ規定にしたがって、農民だと申告した。アルゼンチンに到着した彼らは、それまで聞いたこともない言語に取り組みなければならぬだけでなく、労働力を求めていた農村地帯に定住することになっていたのだ。



南米で唯一の仏教寺院。

ラオス難民たちは2万5000ドル集めて、南米初の仏教寺院を建てた。

踏みとどまって

なかには異国の地であまりに多くの問題と不安定な未来に直面して、耐え切れずに親戚がいるフランスやカナダに行ってしまった家族もいた。しかし残りの者たちは踏みとどまった。農業ではなく、行商人として身をたてた人もいる。

ラオスをほうふつとさせる亜熱帯地方

ミシオネスに移り住んだのは90世帯。20世帯が「ザ・ファーム」に定住し、UNHCRが買い入れた家に引っ越し、申告どおり農民になった。

「やっと農作業がわかってきました」と言うのはナン(45歳)だ。彼女は一般のラオス女性と同じように、夫と農作業をする。

「今の夢は、家族用に小さな養魚場を作ることです。南米に住んで20年たつ今も、魚を中心とした昔ながらの食生活を恋しが

っているのだ。

昨年ラオス難民たちは、寄付や米国とフランスのラオス仏教団体からの無利息融資で2万5000ドルを集め、4か月かけて寺院を建てた。寺はすぐに村人の精神的な中心になった。信者のほとんどは、夜ここにやってきて、ラオスの風景画の側で雑談をして過ごす。アメリカやヨーロッパから僧侶がきて、修行の指導もしてくれる。何件か先には教会があって、カトリック教徒たちが集まっている。

ブラッド・ピットと共演

ラオス人たちは、木のポーチに座って、トロピカルフルーツや米の食事を楽しみ

ながら、自慢話をはじめた。彼らは昨年、ブラッド・ピット主演の映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」に、中国兵や僧侶、露天商などのエキストラとして出演したのだ。一部のシーンは、山岳地帯のメンドサ地方で撮影された。「ギャラはあまりよくなかったけれど、持ち出しはなかったからね。ためてあるよ」と、サマンはブラッド・ピットと撮った写真をまわしながら言う。「楽しかったよ。」

しかし最近、「ザ・ファーム」を取り巻く状況も厳しくなっている。近くにある別のラオス人の村、入り口に「ラオス」と書かれた巨大な門がある。でも状況は同じだ。この村ではUNHCRが提供した家が売られ、村人たちはラオスの伝統的なワラびき小屋に住みかえている。いずれの村の行商人や野菜売りも、だんだん商売が難しくなってきたのを感じている。子どもたちの多くは、小学校を卒業したら進学をあきらめ、仕事に就かなければならない。

帰還を考えて

20年ぶりに母国への帰還を考えはじめた人もいる。97年には3家族が帰還し、ラオス政府とUNHCRの基本的援助を受けたほか、仮の住まいを手に入れ、学校や研修に参加することもできた。しかしほとんどは帰還を慎重に考えている。「生活はよくなるかもしれないけれど、あるラオス人青年は言う。「少なくとも故郷にいられますが。」

首都プエノスアイレスの国際空港では、お針子の24歳のラオス人女性と機械工の弟が、故郷に帰るための飛行機を待っている。「ここで技能を身につけました」と彼女は言う。「これを故郷にもち帰りたいのです」。自分たちが運がいいことは分かっている。寛容な政府が彼らを受け入れ、永住を認めたほか、決して忘れたことのない母国に帰る選択肢を与えてくれた。それはすべての難民に許されたものではない。 ■

文化の衝突

『The Spirit Catches You And You Fall Down (精霊に取りつかれて正気を失う)』: ラオス・モン出身の子どもと、アメリカ人の医者たち、そして二つの文化の衝突

アン・ファディマン著 / ファラー・ストラウス・アンド・ジルー社刊

リア・リーが初めて米国カリフォルニア州マーセドの社会医療センターの救急治療室にかつぎ込まれたのは、生後3か月のとき。ラオスの山岳民族モン出身の両親は、娘は「quag dab pag (モン語で『精霊に取りつかれて正気を失う』の意味)」の兆候が出ていると

いう。しかしアメリカ人医師たちは、「てんかん」の発作と診断した。

リアはフォウアとナオ・カオ夫妻の14番目の子だ。夫妻は、1980年代に第三国定住したラオス難民10万人と米国に来た。上から12人の子はラオス北西部にある竹と茅ぶき屋根の家で産まれた。13人目はタイ北部の緑美しい丘の難民キャンプで、14人目はカリフォルニアの病院で産まれた。

リア以外は、全員モンの習わしにしたがって、胎盤を自宅の床下に埋めることができた。こうすれば死んだとき胎盤(モンの言葉では「上着」という意味の言葉で示す)が魂を包むことができる。「上着」がないと、魂は永久にさまよいつづけなくてはならない。

リアのてんかんと、アメリカ人医師とリアの両親が意思の伝達をできないことから悲劇はおきる。ファディマンの素晴らしい語り口のおかげで、私たちは冒頭からモンの一家とアメリカ人医師の両方に感情移入できる。処方薬を飲ませていないという理由で、全米児童保護サービスがリアと両親を引き離すときは、私たちも憤慨する(この薬は

明らかにリアの症状を悪化させるのだが、フォウアとナオは、それを医者に伝えられない)。若いダン・マーフィー医師が、必死でリアの大発作を落ち着かせるときは息のみ、医者側のモンにひどい偏見をもっていることがわかって、大きな苛立ちをみせるときは共感する。

リアの複雑な治療経過を明らかにするファディマンの手際はあざやかだ。しかしこの本の素晴らしいところは、その詳細な描写だけではない。彼女は完璧に練りあげられた文章で、読む者をわくわくさせてくれる。また、ほとんど知られていない少数民族モンの歴史と文化について豊富な情報を与えてくれる。

『精霊に取りつかれて正気を失う』は難民について書かれた本だ。故郷を逃げ出さなければならなかった人の心の痛みと、見知らぬ異国の地で「よそ者」になることを描いた本だ。そして文化と文化の衝突、権威と道理と友情と愛を描く。あまりにも感動的で印象的だから、ひとたび読みはじめたら夢中になり、何度も何度も読み返してしまうだろう。

モンでは、てんかんは魂がさまよっているしだと信じられている。ファディマンの卓越した物語は、さまよう魂とは、難民が置かれた状況も言い表していることを思い出させてくれる。この本は、難民関係の仕事をしている人すべてが読むべきだ。

ジュディス・クミン

